名所物見の旅　其の六拾壱　清津峡

清津峡遊歩道トンネル終点パノラマステーションからの眺め。清津川の両岸に柱状節理の岩壁が迫る。左側（右岸）には大きな雪渓が残っていた。

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

新潟県にある清津峡は日本三大峡谷のひとつに数えられている。峡谷という言葉から響いてくるのは、幽深な奥山の両岸切り立った断崖絶壁の間を流れる深い谷であり、しかも豊富な水流がなければそのイメージにそぐわない。日本三大峡谷とは黒部峡谷と大杉谷、清津峡の三ヶ所を指すという。このシリーズでも紹介した黒部峡谷（下ノ廊下2005年11月4日号 / 水平歩道2009年12月18日号）はもちろん日本一の峡谷であることに異論の余地はないが、大杉谷と清津峡は崩落のため入山が規制され、その全貌を見ることが出来なくなっている。大杉谷はいまだ核心部の通行が出来ず、完全復旧には数年を要するという。一方、清津峡は観光トンネルによる見学が可能ということなので、六月上旬に出かけてみることにした。

清津峡は新潟県と長野県の国境に聳える佐武流山（2191.5m）、苗場山（2145m）、白砂山（2139m）といった豪雪の山々を水源として、湯沢町八木沢から十日町小出に至る清津川12.5kmの区間に名付けられた峡谷である。旅の初日は小出にある清津峡温泉に宿をとって、さっそく遊歩道の清津峡トンネルで一般見学ルートを歩いてみた。入口で入坑券代500円を支払いトンネルに入る。全長750mのトンネルの途中三箇所の見晴所と終点のパノラマステーションからは、岩壁が両岸から迫る峡谷美を間近に見学することができる。地質学的には500万年前の新第三紀鮮新世に地下から噴出された岩漿（マグマ）が冷却凝固して、特徴ある柱状節理の岩壁が形成されたという。山々に残る巨大な雪渓から流れ出す雪解け水で、谷には大量の水が勢いよく流れていた。岩壁に穿たれたかつての峡谷沿いの登山道が、所々に残っている。この登山道は昭和六十三年（1988）に落石事故のために閉鎖されて廃道になり、地元の要請によって観光用遊歩道トンネルが平成八年（1996）に完成して、再び清津峡は人の目に触れることができるようになったのだという。

パノラマステーションでは多くの観光客が、清津峡の偉観に感嘆の声を上げていた。しかしわたしにはどうにもこれだけでは物足りず、外に出て旧登山道から写真を撮りたいと思ったのだが、トンネルから外に出たり旧登山道へ立ち入ることは禁止されている。そこで入口の解説板に書いてあった温泉の裏手から尾根へ登って満寿山（956m）を越えて川へ下り、八木沢からの沢沿いの登山道に通じているという清津峡登山道で上流方面に行ってみることにした。この登山道は清津峡の落石事故後に、上流部の足尾沢までの迂回路として作られたという。満寿山へは高低差600メートル近くを登らなければならず、温泉から足尾沢まで往復するとトータル1200mを登り下りしなければならないことになる。もう正午近かったが日の暮れるのが遅い6月であることだし、とりあえず大型カメラ一式と水を担いで歩き出した。山は雪解けあとであまり人が入った形跡がなく、登山道には落ち葉が積もり滑って歩きにくい。所々に熊や鹿の糞がある。秋ではないので熊にもそれほど心配する必要はないであろうが、あまり気持ちのよいものではない。

清津峡温泉清津館の露天風呂は、川原の景色を楽しみながら湯に浸ることができる。ややぬるめの「弐号泉」と熱い「薬師の湯」が岩風呂に溢れている。

十二大明神という祠が建つところまで登り、一休みして汗を拭いた。眼下に見える田んぼには水が張られて、キラキラと輝いている。水分を補給して出発するが、重荷のせいで予想以上に足どりは重く、温泉から満寿山まで二時間半近くかかってしまった。しかもここまで谷はほとんど見えず、カメラの出番は一ヶ所もない。重いザックを担いでいるのが嫌になってきたので、ここに荷を残して空身で偵察することにする。満寿山から先はゆるい下りとなって薄暗い樹林帯の尾根が続き、二重山稜の窪地は大量の残雪で埋まっている。樹林からは春ゼミの鳴声が賑やかでやかましい。残雪期の山は至るところで春と夏が混在しているが、雪とセミの取り合わせにはちょっと違和感を感じる。やがて日向の肩に到着すると、その先は清津川の谷底までロープが設置された足場の悪い急斜面になっている。すこし下ってみたが、帰りはその分登らなければならない。体力と時間を考えると今日は足尾沢まで下ることは不可能と判断し、それ以上進むのをあきらめた。清津峡温泉に戻って宿の主人に聞くと、7月になれば登山道が整備されるので、ずっと歩きやすくなるだろうとのことであった。そしていまの季節の新緑もよいが、10月下旬から11月の紅葉はまた一段と素晴らしいので是非お出かけくださいと誘われた。

清津館の夕食。膳には雪解けの山に芽吹いた新鮮な山菜が並べられ、春の香を満喫した。

清津峡温泉は江戸時代後期には小出鉱泉と呼ばれ湯治客で賑わっていたことが記録されており、昭和になってボーリングの結果42度の温泉（弐号泉）が湧出して改名されたという。平成16年には49度の単純硫黄泉“薬師の湯”が再ボーリングされ、清津館の露天風呂では二つの湯がそれぞれの湯舟に溢れている。ほんのり硫黄臭がする湯は肩こりなどの慢性疲労に効能があるというので、清津川のせせらぎを聞きながらのんびりと湯に浸った。宿の夕食は雪解けの山に芽吹いたばかりのミズナ、ズイキ、コゴミ、木の芽（ハジカミ）などの山菜が、工夫を凝らして彩りよく皿に並べられていた。動物性たんぱく質は山女の塩焼き、鯉のカルパッチョ、セリの卵とじに入った数切れの肉だけ。あとはすべて新鮮な山菜尽くしで、都会では味わえない春の香を十分に堪能した。

翌朝は雲は多いが天気は持ちそうだったので、清津川上流の八木沢から清津峡に入ってみることにした。宿から十二峠トンネルを抜けて石打に出る。学生の頃見たガイドブックには、登山者が石打から清津峡に行くには、歩いて十二峠を越えるのが一般的なコースとして紹介されていたのを覚えている。昭和54年（1979）に十二峠トンネルが開通するまで石打からの車道はなく、他には飯山線の越後田沢駅からのバスで清津峡に入るといった、東京方面からはかなり遠回りとなる方法しかなかった。現在は越後湯沢駅から石打・十二峠トンネル経由で清津峡へのバスが出ている。

石打から国道17号を南下して、湯沢から三俣方面に向かい八木沢集落に車を止めた。この周辺は谷川岳や苗場山などの登山や温泉巡り、神楽三俣のスキー場通いなど何度も通った懐かしいところだ。なかでも苗場山の山頂湿原と懐に湧く秘湯“赤湯”や三国街道沿いにあるやさしい泉質の“貝掛温泉”の素晴らしさが印象に残っている。

八木沢からは清津川に沿ったブナの林の道を行く。起伏の少ない道を30分ほど歩くと、「大峰の原水」と呼ばれる清水が湧き出している水場があり、おいしい天然水をたっぷりと飲んだ。八木沢から即かず離れずしていた穏やかな流れの清津川はやがて急峻な谷になり、道も高巻きしながら上下するようになる。水場から1時間ほどで鹿飛橋に到着した。川幅が狭く鹿が飛び越えたという伝説から付けられた名で、橋の上から眼下に見える谷は深い淵に大量の水流が暴れていて、険悪な様相を見せている。ここから先は未整備の悪路なので、登山装備を持たない人は引き返すようにと看板に書かれてある。鹿飛橋も手すりが取り外してあり、高所恐怖症の人は渡れないかもしれない。わたしは行けるところまで行くつもりで、とりあえず前進した。豪雪の影響で道が所々消えかかっているが、慎重を期せばそれほど難しい所はない。新緑の間から深い谷が見えて、峡谷の名に相応しい風景が続く。登山道を横切る沢には大きな雪渓があちこち残っており、また崖が崩落して通過に手間取る場所もあった。

鹿飛橋から30分で高石沢に出た。沢は目の前で数十メートルの滝となって、清津川本流に落下している。渡渉点が見つからず、藪漕ぎして上流を探ってみたが、水量が多いせいもあって、どうにも渉れそうにない。無理に渉ろうとして流されれば、下に待つ滝壺へ落下して一巻の終わりである。上空を見上げると怪しい空模様になってきている。雷雨注意報が出ていたので、たとえ先に進めても雷雨で増水すれば帰るのは不可能となろう。すでに渡渉点を探して30分が経過している。もうこれ以上の長居は無用と、来た道を引き返した。渇水期なら渡渉もたやすいはずなので、次回には必ず清津峡の核心部まで足を踏み入れてやろうと、秋の再挑戦を誓いながら更なる期待を胸に山旅を終えた。

鹿飛橋から山道を進むと、新緑の間から清津峡の深い谿を垣間見ることができた。